

中国語圏における俳句の影響について
——俳句の中国語訳を中心に（その三）

呉 衛峰

東北公益文科大学総合研究論集第三十九号 抜刷

二〇二二年一月三十一日発行

中国語圏における俳句の影響について

——俳句の中国語訳を中心に（その三）

呉 衛峰

はじめに

芭蕉句の良質な翻訳としては、林林訳『日本古典俳句選』所収のものが挙げられる。そこに選ばれた芭蕉句は206句を数え、全書分量の半分を占める。前述のように、芭蕉句の翻訳にあたり、林林は句の内容や言葉の特徴に合わせて文語訳と現代語訳を使い分けている。それに対して鄭清茂は『芭蕉百句』においては、基本的に四六四の定型による文語で翻訳している。¹

林林訳には、早稲田大学留学時からの友人であり、著名な民俗学者である鍾敬文（1903～2002）による序文が寄せられている。鍾は林訳の出来栄を賞賛すると同時に、切字を訳出すること、現代文を使用することを提案した。それに対し、切字にあたる言葉を一つの翻訳集を通して使用すると、中国語という文脈ではどうしても読者に単調雷同の印象を与えかねないと、林林は二年後のある文章の中で答えている。²

一方、鄭清茂は『芭蕉百句』の前書きにおいて、四六四の十四字定型訳は、確かに定型を整えようとすれば原文になり文字を足さざるを得ない場合も出てくるが、訳書全体の統一のため、やむを得ないことであり、翻訳の一つの方法で

もあるという認識を示している。いずれにせよ、鄭訳には一句ずつに直訳も付されているので、定型維持の損失が補償されていると思われる。

季語に関しては、鄭訳では原文と翻訳との対訳方式を取っており、原文における季語を明記している。逆に句の配列は初出の時間順によっている。林訳では季語に対する言及がない代わりに、全体は歳時記のように季節と季語で分類列されており、読者の鑑賞にゆだねている感がある。

林訳には「俳句選」の部分に原文が付されていない。本研究ノートは、芭蕉句の翻訳に原句を付す上、季節毎に分けて両者を比較しつつ、林訳の特徴等をもう少し踏み込んで検討したい。

一、新年・春

林訳には四季の前に「新年」の区分があり、四句中の二句を掲げる。

○ 2³

元日やおもへばさびし秋の暮⁴

正是年初一¹，

想起暮秋寂寞日。

○ 3

年々や猿に着せたる猿の面

◎ 鄭訳 87⁵ …

一年複一年

一年又一年，

猴子所戴面具

叫猴戴假面。

還是猴面

2の訳は平明な古文（漢文）体であるが、3の訳は明らかに現代口語文となっている。3の鄭訳は五六四となっており、句中に季語がないので、「無季」と注している。林訳はこの句を「元日」という題に従って、新年に分類したのである。芭蕉の時代では旧暦が使われていたので、元日は春の季語（正月）とされ、四季と並列する「新年」の大分類はなかったはずである。

林訳の「春」の部には、46句が収められている。鄭訳との重複句のみを掲げる。

○8

◎鄭訳25..

春なれや名もなき山の薄霞

春來了吧

春日已來矣，

看那無名山上

此山何名未得知，

披著淡霞

暮靄透明媚。

この二句を見れば分かるように、どちらの訳も単純に文語・現代語とはつきり定めておらず、内容などに合わせた「文語・現代語の混交体」となっている。違いはやはり定型の有無である。

○11

◎鄭訳91..

春雨や蜂の巣つたふ屋ねの漏り

屋頂漏春雨，

順着蜂巢点点滴。

春雨綿綿

沿著蜂窩滴下

屋頂漏水

○13

猫の恋やむとき閨の朧月

猫儿叫春停歇时，

闺中望见朦朧月。

◎鄭訳 85..

猫兒叫春

喵喵頓歇閨中

月色朦朧

○22

梅白し昨日ふや鶴を盗まれし

白梅正开好，

白鶴昨天可被盜？

◎鄭訳 26..

梅綻白花

難道昨日仙鶴

被偷走了

上記三句の翻訳を比較すれば、林訳はより詩的であり、定型の鄭訳はやや散文的になっている感みがある。

○34

木のもとに汁も鱈も桜かな

树下鱼肉丝、菜汤上，

◎鄭訳 68..

樹蔭底下

羹湯菜餚上面

飘落櫻花瓣。

盡是櫻花

○37

◎鄭訳 11..

花にうき世我酒白く飯黒し

花有憂容

对花忧人間，

浮生我酒濁白

我酒浊飯淡。

飯是黒色

○39

◎鄭訳 37..

花の雲鐘は上野か浅草歟

花雲飄悠

花云飄渺，

鐘聲來自上野

钟声来自上野，

還是淺草

还是浅草？

このような、一文字のみ違うほど似通っている翻訳も見られる。

○45

◎鄭訳 50..

草臥て宿かる比や藤の花

忍住疲乏

投宿已疲乏，

正值投宿時分

忽又見藤花。

忽見藤花

○46

ほろほろと山吹ちるか滝の音

棣棠落花簌簌，

可是激湍澗澗？

◎鄭詠49..

翩翩飛舞

棠棣花紛紛落

湍流伴奏

○47

菜畠に花見貞なる雀哉

菜花开满园，

麻雀赏花颜。

◎鄭詠28..

油菜田裡

麻雀飛來賞花

裝模作樣

○49

山路来て何やらゆかしすみれ草

山路費攀登，

竟有可爱紫地丁。

◎鄭詠27..

行至山路

何物引人人勝

紫堇小花

○51

衰や齒に喰あてし海苔の砂

啗到紫英砂，

感叹老衰牙。

◎鄭詠77..

老矣老矣

牙齒喀啾嚼到

海苔砂子

というように、詩としての訳の出来栄えを言えば、林訳が優っていると見えよう。

二、夏

○68

雲の峰幾つ崩て月の山

几道云峰解散，

新月耀辉东土。

◎鄭訳63..

雲峰高聳

崩散處處聚合

幻成月山

この句の訳については、林訳は意識が行き過ぎ、原文の「月山」という掛詞の面白さを訳出していない。つまり、林訳はあくまでも訳の独立した詩味を重視していることであろう。対訳式の鄭訳は定型と原文の二重の縛りがあるゆえ、その辺の自由がないが、原文の形式における面白さを伝えている。

○69

命なりわづかの笠の下涼み

命也如是，

只有草笠下，

稍得些凉意。

◎鄭訳3..

命也如此

僅剩斗笠下面

一絲陰涼

○73

郭公声横たふや水の上

◎鄭訳 88..

郭公鳥啼

时鸟声横江水上。

一聲不如歸去

横過水上

一行と三行という訳の比較は両者の特徴を端的に表している。

○76

頓て死ぬけしきは見えす蟬の声

◎鄭訳 74..

即將死去

知了在叫，

卻無自覺模樣

不知死期快到。

快活蟬聲

○77

艸の葉を落るより飛螢哉

◎鄭訳 69..

從草葉上

螢火虫，

墜下旋即飛起

剛落下草叢，

螢火一閃

就从草丛飞升。

○78

◎鄭訳 62..

蚤虱馬の尿する枕もと

跳蚤蝨子

蚤虱横行，

滴答馬兒尿尿

枕畔又闻马尿声。

就在枕邊

三、秋

林訳でも、鄭訳でも、四季の中で秋を詠む句が圧倒的に多い。

○94

◎鄭訳52..

はつ穂や海も青田の一みどり

迎來初秋

初秋时节，

蒼海綠田連綿

碧海青田一色。

青翠一片

○96

◎鄭訳14..

野ざらしを心に風のしむ身哉

曝屍荒野

此身或将曝荒原，

寸心此去已決

风吹入骨寒。

沁身風寒

○97

◎鄭訳7..

かれ朶に鳥のとまりけり秋の暮

寒鴉宿枯枝，

深秋日暮時。

枯木枝頭

烏鴉兀自棲止

秋日黃昏

○98

此道や行人なしに秋の暮

秋日黃昏，

此路无行人。

◎鄭詠94..

在此道上

一個行人也無

暮秋黃昏

○100

髭風を吹て暮秋歎ずるは誰が子ぞ

西风扶須時，

感叹秋深者谁子？

◎鄭詠12..

鬚子吹風

暮秋有人哀嘆

誰家之子

○104

荒海や佐渡によこたふ天川

大海波翻，

銀河横挂佐渡天。

◎鄭詠64..

怒海滔天

横互佐渡蒼茫

星河閃爍

○108

◎鄭訳15..

猿を聞人捨子に秋の風いかに

遊子聽猿

听得猿声悲，

棄兒在秋風裡

秋风又传弃儿啼，

如何是好

谁个最凄惨？

この句の「いかに」を林訳より鄭訳は正確に訳している。

○110

◎鄭訳13..

秋風や藪も嶋も不破の関

秋風蕭索

不破关口秋风，

草原田野處處

吹过田原草丛。

不破關墟

○113

◎鄭訳65..

石山の石より白し秋の風

石頭濯濯

比起石山石，

岩石白潔如泥

秋風色更白。

秋風更白

林訳は注釈で、「風」を「白し」と詠むような、芭蕉句における共感覚の多用に注目している。

○114

名月や池をめぐりて夜もすがら

秋月明，

一夜绕池行。

◎鄭訳33..

名月當空

绕著池塘徘徊

佳興終宵

○117

名月や門に指くる潮頭

明月如昼，

门前涌入潮头。

◎鄭訳86..

名月當空

指向門口而來

潮風洶湧

○122

馬に寐て残夢残月茶の烟

迷蒙马背睡，

月随残梦天边远，

淡淡起茶烟。

◎鄭訳18..

馬上打盹

残夢弦月迢遙

茶夢裊裊

この句の林訳は詩情豊かで、独立とした詩として一品である。

○125

◎鄭訳54..

梯や姨ひとりなく月の友

老姬独自泣，

愁容赏月友。

幻影恍惚

老婦獨自哭泣

月娘為友

○128

月いづく鐘は沈る海のそこ

吊鐘沉海底，

明月何处去？

◎鄭訳67..

月在何方

吊鐘沉沒不見

海底深處

○133

霧しぐれ富士をみぬ日ぞ面白き

濛濛烟雨，

不見富士姿，

另有风情。

◎鄭訳17..

霧雨濛濛

富士不見之日

趣味盎然

○137

家はみな杖にしら髪の墓参

亲人皆白发，

拄杖扫坟去。

◎鄭訳92..

都是家人

扶杖而髮蒼蒼

同去掃墓

○155

草の戸や日暮てくれし菊の酒

茅舎日将暮，

贈来菊花酒。

◎鄭訳83..

閒居草庵

日暮有人攜來

菊酒一罈

○158

菊の花咲や石屋の石の間

石屋石縫間，

秋菊花自鮮。

◎鄭訳89..

菊花開了

開在石鋪門前

石堆之間

○159

菊の香やならには古き仏達

奈良古佛前，

菊花香。

◎鄭訳93..

悠悠菊香

奈良古香古色

尊尊古佛

○164

秋海棠西瓜の色に咲にけり

秋海棠，

花开西瓜色。

◎鄭訳81..

秋海棠花

染上西瓜顔色

正自盛開

○165

◎鄭訳10..

芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉

芭蕉秋颯摧葉

風揺芭蕉叶，

瓦盆承水滴答

听雨落盆夜。

漏夜聽雨

○167

◎鄭訳20..

蔦植て竹四五本のあらし哉

栽植蔦蘿

庭种常青藤，

竹子四枝五枝

四五竿竹枝风。

迎風招展

○168

◎鄭訳16..

秋十とせ却て江戸を指故郷

羈旅十秋

江戸客居已十霜，

卻指異郷江戸

便指是故乡。

說是故郷

このような明らかに漢詩を出典とする句が多く採用されていることは、やはり文化的親近感からの選択であろう。

○171

◎鄭訳95..

此秋は何で年よる雲に鳥

今年秋來

今秋为何添霜鬓，
飞鸟入浮云。

怎地突然衰老
鸟入雲中

○172

秋深き隣は何をする人ぞ

◎鄭訳 97 ..
秋意深矣

秋深矣！

不知鄰居房客

不知邻人做什么事？

作何營生

四、冬

両訳とも、冬の句は夏と同じほど少ない。

○175

年暮れぬ笠きて草鞋はきながら

◎鄭訳 2 ..
歲將暮矣

岁暮不能歇，

依然戴著斗笠

仍須穿草鞋。

穿著草鞋

○176

旧里や臍の緒に泣としの暮

◎鄭訳 47 ..
回到故居

岁暮归故里，
凝视脐带泣。

手摸脐带潸然
又是岁暮

○177

◎郑訳61..

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也

初逢時雨

初寒降雨，

猴子也想穿上

猿夜想小蓑衣。

小小蓑衣

「時雨」のような日本語表現（中国語では意味が違う）は、鄭訳はそのまま使っているのは、台湾でも定着しているからであろう。林訳はこのような言葉をおおかた意識している。

○181

◎郑訳5..

霜を着て風を敷寝の捨子哉

披霜為衣

遗弃儿，

寒風且當被窩

霜为衣，

悲哉棄嬰

风为被。

○183

◎郑訳35..

酒のめばいとゝ寐られね夜の雪

喝起酒來

独酌更难眠，

輾轉更難成眠

夜來風雪天。

夜雪霏霏

○189

◎鄭詠21..

琵琶行の夜や三味線の音霰

憶琵琶行

夜聞琵琶行，

夜裡聽三味線

撥弦恰似雪珠声。

霰珠嘈切

この句も同じく漢詩出典の句である。「霰」という表現は漢字には存在するものの、現代中国語ではほとんど通じないので、林詠は「雪珠」と意識している。

○193

◎鄭詠98..

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

病纏羈旅

旅中正卧病，

夢中夢遊荒原

梦绕荒野行。

到處奔走

おわりに

両訳の重複句を以上のように並べてみると、それぞれの特徴も浮かび上がってくる。

一、林訳は形式的に自由であるので、詩的完成度は鄭訳より優っている。鄭訳は散文的という憾みがあるが、俳句本来の形・特徴等の紹介に関しては林訳より分かりやすい。

二、林訳はときに意識的飛躍が見られるが、鄭訳は原句に忠実であり、より正確である。

三、「時雨」、「霰」など、現代中国語ではほとんど使われない表現について、林訳は基本的に意識やパラフレーズの表現を使用するが、鄭訳はそのままの漢字で訳に移している。

季節別（季語別）による比例を調べてみると、林訳においては、春（元日を含む）は47句あり、全体（206句）の24.7%を占める。夏は42句、20.3%である。秋は79句、38.3%である。冬は34句、16.5%である。

鄭訳においては、百句のうち、春（雑一句を含む）は23句である。夏は20句である。秋は39句である。冬は18句である。両訳における四季の選択はほぼ同じ比例となっており、とりわけ秋が多いのも同じであるので、選句方針が何に影響されたのかについて、これから考察すべき課題となろう。

注..

¹ 呉衛峰「中国語圏における俳句の影響について——俳句の中国語訳を中心に（その一）」（東北公益文科大学総合研究論集第37号別冊、2020年3月30日）を参照。「注1」、「注6」。（11）頁。（1）頁、（4）頁、（5）頁。

² 呉衛峰「中国語圏における俳句の影響について——俳句の中国語訳を中心に（その二）」（東北公益文科大学総合研究論集第38号、2020年7月30日）、「注1」を参照。再版（人民文学出版社、2005年1月）…十一～十二頁、一二〇～一二二頁。鍾敬文による序文の日付は「一九八二年十二月十一日」となっており、初版（湖南人民出

版社、1983年12月）に掲載されている。それに対する返事を含めた「俳句翻訳の心得」（原文…試译俳句的体会、再版所収）という文章の日付は「一九八五年五月一日」となっており、初出不明。

3 数字は筆者の整理による林訳芭蕉句の通し番号である。以下同。

4 芭蕉俳句の引用は断りがない場合、すべて井本農一・堀信夫注解『松尾芭蕉集① 全発句』新編日本古典文学全集（小学館、1995年7月）による。便宜を図るため、漢字字体等の変更が若干ある。

5 数字は鄭清茂訳『芭蕉百句』における句訳の通し番号である。